

## 申込事業計画説明及び質疑応答まとめ

## (1) 第4回 心をつなぐ若林シーサイドマラソン

## 【プレゼン概要】

若林区沿岸部に整備された管理用堤防をコースとしたマラソン大会を開催する。前大会での課題を解決し、参加者が参加しやすい環境を整えるとともに、「震災の経験を風化させない、復興により変わりゆくその道程を確認してもらう」という事業目的に添うパネル展示の発展や新たにメッセージボードの設置を行う。マラソン大会を継続することで、沿岸部を訪れるきっかけとなり、この地域の再生を知り、新たな利活用につながる事業としたい。

## 【質疑概要】

- Q パネル展示の発展とメッセージボードの設置に取り組み、計画書に記載しているように「心をつなぐ」「震災を風化させない」ために、沿岸部を走る以外でも震災と向き合うというメッセージを発信していきたいという主旨は理解できたが、事業費のなかでどのように反映されているのかが、収支予算書からは見えてこない。具体的にどこに反映されているのか。
- A パネルについては、収支予算書のなかで「テント、トイレ等レンタル品一式」と記載したところに計上されている。
- Q 昨年度の実績から比べるとあまり増額がされていないようだが。パネル展示を発展させ、新しくメッセージボードを設置しても、この金額で収まるのか。
- A はい。パネル費用はそれほど金額が大きくかかるものではない。一番かかるのが、写真を集める時間で人件費となる。それは助成対象外費のプランニング、ディレクションのなかに含まれている。
- Q 計画書では、パネル展やパンフレット記載など「心をつなぐ」「震災を風化させない」という事業目的を強化するために助成金を使用するとの記載があり、また先程の説明では、パネル等の代金は「テント、トイレ等レンタル品一式」のなかに含まれているとの話であったが、助成金はこの「テント、トイレ等レンタル品一式」にかかる130万円のなかで使用するという認識でよろしいか。
- A 助成対象費のどこに使うというのではなく、まんべんなく利用させて頂いているという認識でいる。50万円を特定のところに使うためのものという認識も重要だとは思いますが、全体の事業費としてこの助成金を利用したいと考えている。
- Q この助成は3回までとなるが、今後も事業を継続するにあたって、助成金がなくなった後も同様の規模で実施する場合として、協賛金を増やすことや参加費をあげるなど、何か検討していることはあるか。
- A 実行委員会では、今後も参加費をあげることは考えていない。事業を継続するために、協賛金を増やすことで補えるようしっかりプランニングしていきたい。
- Q 実行委員会の体制づくりで気になっているところがある。この実行委員の10名で事業を実施していると思うが、会長、副会長、実行委員長、委員1名とすべて1企業で占めている。これでは企業イベントなのではないかと見られても仕方がない。協力者を増やしたいという説明があったが、市民活動として今後盛り上げていくためにも、多く企業に広告枠ではなく、協働のパートナーとして一緒に事業に参画してもらい、そのなかで

人もお金もだしてもらおう体制づくりが必要であると思うが、今後の体制づくりをどう考えているのか。

A 1 企業に多く出資頂いている点においても企業色は否めない。今後の展開については、プレゼンで説明した「協議会」をつくりたいと考えている。コースを延長するエリアでは、来年度から沿岸部の利活用事業が動き始めるので、それぞれの利活用事業者に協力して頂きたいと思っている。今までのコースには、利活用事業者がいなかったもので、このような取り組みはできずにいたが、コースを延長することで可能となる。コースを走るなかで、利活用事業の施設が見えるようになるので、その特色をみせることで、沿岸部が盛り上がってきているとPRできるイベントにしていきたい。今年増えた協賛企業はこの利活用事業者でもあり、先を見越して協賛頂いていた。沿岸部の発展に伴い、この事業の関わり方も変わっていくと考えている。

Q 毎年12月第2週目の日曜を開催日としたいとの説明であったが、何か理由があるのか。

A 宮城県内で開催されるマラソン大会の最後となり、走り納めのマラソンの位置づけとなることと、事業目的に絡むことだが、震災のあった3.11は雪が降っており、かなり寒かった。ランナーにもそれを感じて走ってもらいたいという思いもあり、冬の寒い時期の開催とした。

【プレゼン概要】

御譜代町として発展した歴史ある荒町の活性化のため、何度も訪れてもらえる「まちのファン」を増やす取り組みとして、新たに取材編集チームを育成し、地域情報紙「荒町さんぽ」を発行する。荒町の地域活性化に興味のある若者と地域が協働できる基盤を構築し、まちづくりの新たな担い手を育成することで、「荒町さんぽ」の定期発行以外にもまちを活性化するプロジェクトにつなげ、荒町のまちづくりのプラットフォーム形成を目指す。

【質疑概要】

- Q 市民ライターを育成するとのことだが、興味があるけど今まで経験がない初心者育成対象として募集するという認識で良いか。また今後においてだが、「荒町さんぽ」に限定しての市民ライターか、それともプロを目指すところまで育成するのかを伺いたい。
- A 初心者を基本として募集をする予定であるが、若干の経験がある方もかまわない。取材編集チームを編成した後の活動は、ボランティアでの地域活動の位置づけである。
- Q 助成金の比率が高いと感じている。もちろん初回であるので、比率が高いのは仕方がない部分ではあるが、今後の継続性において、または助成金が得られなかった場合など、この事業を実施する上での収支の検討はしているか。
- A 宮町で継続して発行している「038PRESS」を参考にしたいと考えている。「038PRESS」は、年間100万円の事業で、その収入のほとんどが協賛金だと伺っている。どうやって協賛金を集めているか等のノウハウを学びたい。今後はフリーペーパーの発行頻度により、事業予算も変わっていくと思う。今年度はコーディネーター謝金にかかる費用が多く支出されているが、次年度以降はコーディネーターとの関わりも薄くなっていくので費用は少なくなる。また、自前でコーディネートもできるようにしていきたい。
- Q 協賛金を増やすために、広告協賛枠を増やすと本来書きたかった記事のスペースがなくなってしまうので、広告による協賛の概念を無くし、事業に協賛を頂いた方が良いと思う。今回は、広告枠として4枠を用意しているとのことだが、今後はどう検討しているか。
- A その手法についても「038PRESS」に学びたいと考えている。仙台では、どのような形のフリーペーパーが受け入れられるのか、これから勉強していきたい。
- Q 発行する「荒町さんぽ」の配布対象者は誰を想定しているか。また商店街や大学との連携により事業を進めていきたいとの説明であったが、1年目は人材育成ということで、講座を中心とした活動になるが、今後において、どのような展望をもって、荒町の活性化のプラットフォームづくりを進めていくのかを伺いたい。
- A 事業計画書に記載のとおり、配布対象者は「荒町に来たことはあるが、詳しくは知らない」といった荒町のビギナー層を対象としている。今後の展開については、まずは定期発行していきたい。
- A 荒町でホテル業を運営しており、そこで月に300名～500名の宿泊がある。宿泊者からは「荒町どこに行けばいいの」とよく聞かれるので、フリーペーパーを渡すことができればと思う。また荒町には魅力あるオーナーがたくさんおり、フリーペーパーに記載することで、実際にその店で行き、オーナーを触れ合い、まちの思い出となることで、再び荒町にきてもらうことにつなげる、そういう発信の仕方ができればと考えている。

- Q フリーペーパーの発行以外に、荒町には伝統がある施設やイベントがあると思うが、そのような活動への参加や企画は検討しているか。
- A 人材を育成する過程において、実際に荒町のイベントに参加し、記事を書くことになる。すぐに記事が書ける方もいれば、なかなか書けない方もいると思うので、何回かやってみるうちにレベルアップしてければと思う。荒町のイベントには複数人数で参加してそれぞれ記事を書いてもらう方がひとつの記事にまとまりやすいのではないかと考えており、手法は「038PRESS」に学びたいと思っている。
- Q 情報発信の意味合いは充分理解できたが、情報発信がどのように展開し、まちのプラットフォームにつながっていくのか、まちづくりのプラットフォームの具体的なイメージを伺いたい。また、荒町商店街は脈々と試行錯誤しながら頑張ってきたまちのイメージを持っているが、そのような店主達のなかで「若者、よそもの」がどのような形で参入し、まちづくりという共通の目標を持って取り組んでいくのかという発展の構想を伺いたい。
- A 具体的なプラットフォームのイメージはまだないが、昨年6月に食事は出さないホテルとしてオープンしてから、安価で泊まれることで新しい方がまちに来やすい状況にあり、宿泊者に食事等の場所や荒町店主のお勧めを伝えて、まちに流すことを続けてきた。実際に店に行き、そこで触れ合いから交流が生まれ、次につながっている例もでており、ホテルが荒町に受け入れられていると感じている。そのなかで今回「まちを発信する」という事業に発展し、荒町店主のなかで協力を得られるところもできた。荒町はもともと味噌、麴のまちで長屋になっている敷地のなかに井戸があるところもある。それは、私たちにとって知らない文化であり、ぜひ見せてほしいとお願いしているところだ。400年前の歴史がわかるような場所を、今は難しくても徐々に協力頂き、案内やまち歩きができるようになるなど、まちと関わっていきたいというのが目指す形だ。民泊のような、民家でご飯を食べることができる「まち」になればとも思う。そして「若者、よそもの」が荒町で起業したいと思ったときに、相談相手として荒町店主達が気軽に協力してあげる関係になることが将来像としてある。まずは、まちに人がきて、まちの魅力を知ること、荒町に住んでいる方にはあたりまえのことでも、改めて文字や写真にして荒町の魅力を発信できればと思う。
- A まち歩きのイベントを試験的にやった時に、そこに参加していた連坊の町内会長から「まさに僕たちがやりたいのはこういうことなんだよ」との感想を頂いた。まち歩きの内容は、店主のところを巡って、お話を聞き、そこで買いものをするという企画だったが、このようなまち歩きをこれからもっと増やしていきたいと思う。
- A 観光地をめぐる中継地点として宿があり、そのなかで荒町に人をだしていくための手段のひとつとして「まち歩き」が良いと聞き、先進的な取り組みをしている講師を呼んで試験的にまち歩きを行った。まちの魅力を歴史的な背景を交えて伝えるとき、「昔を知らない、新しく入ってきた者」が伝えると説得力に欠けてしまう。そこでお店をめぐり、昔を知っている店主に語り部になってもらった。その場で話を聞くことで、ガイドブックでは味わうことのできない体験と客の質問に店主が答えるというコミュニケーションも生まれ、参加者に荒町を好きになってもらえる企画であることを実感した。もっと話をして頂ける店や人を増やし、ただ見るだけの観光ではなく、荒町を好きになってもらうまち歩きをフリーペーパーの発行ともにやっていければと思う。

意見 インバウンド向けの多言語の地域情報発信が柱のひとつとしてあれば、もっと事業の目的に添うのではと感じた。検討してみしてほしい。

A はい。

Q ゲストハウスはこれまでも地域志向の事業に取り組んできているが、ゲストハウス経営は基本的に営利的なもので、地域事業も営利的な部分で賄っていたと認識している。そのうえで今回の事業は、それまでの枠組みのなかではできないものだったという見解でよろしいか。今までの事業との違いや関係を伺いたい。

A 経営としては、宿泊業とは別に不動産業を営んでおり、「空き家をどう活用してまちが面白くなるか」に取り組んでいた。そのなかで法律の改正に伴い、荒町に簡易宿泊所をオープンさせたが、1年目でもあり経営としてはきびしい。今までの事業との切り分けであるが、宿泊業はただ宿泊さえできれば成り立つが、「まちをもっと知ってもらいたい、多くの方に荒町に来てもらいたい」となると、従業員だけではできない。また、事業費を捻出することも難しい。この助成事業で、また新たに荒町を知って頂くきっかけをつくり、荒町地域全体の活性化につなげたい。

【プレゼン概要】

江戸時代からある地域資源「六郷堀」「七郷堀」において、水辺景観と環境を守り育て活用し、また歴史や文化を知ることにより、貴重な水辺資源に興味・関心を育める地域づくりを行う。安全性を充分確保し、普段は体験できない堀の中でゴムボートによる「堀下り」を実施することで、地域で安全面や管理面で敬遠されることが多い堀に、多くの市民が興味をもち、堀の良さを知って頂き、関心をもつ機会としたい。

【質疑概要】

- Q 農業用水として利用している時期に、堀を利用した事業をすることは、全国的には実践があるとは言いながら、仙台市で行うにはハードルが高いと聞いたことがある。これまでのところの堀の許可にかかる交渉状況はどうなっているか。
- A 安全性を一番心配されており、現在も交渉中である。先ほどのプレゼンで説明した安全性については、行政側から求められた安全性への答えが入っている。
- Q 許可がおりる実現性としてはどのように感じているか。
- A ぜひ実現したいと思っているし、地域も実現を望んでいる。われわれの団体としては堀のなかの安全性より、むしろ帰りに戻る道路の安全を心配している。水のなかで事故が起こる可能性は低い。堀で流されることは無いし、ライフジャケットも着用する。
- Q 実施予定時期が5月の早い時期なので心配しているが、実施時期までに堀の使用許可がおりない場合、それに代わる事業を考えているか。
- A ゴムボートでの堀下りができない場合はこの事業はできないが、六・七郷堀研究会としては別な形で活動していきたい。
- Q 収支予算書に関して、イベント①の参加費が100円、イベント②の参加費は1,000円と記載してあるが、この参加費の違いは何か。
- A イベント①は地元での開催で、南染師町西部及び東部子ども会の子ども・親を対象としているため、保険料だけの参加費となっている。イベント②の方は、チラシやSNS等を利用した一般募集を考えており、この参加費を算出した。
- Q 支出の部の記載でゴムボートが3艇、ライフジャケットは12個とあるが、参加者は30名とあり、どのように利用するか伺いたい。
- A 3艇に4名ずつを考えており、それを3回繰り返す予定。1艇ずつに流しても良いが、トラックでの搬送などの効率を考えて、3艇を同時に流すことを考えている。
- Q 同じく支出の部で傷害保険料になるが、内訳に50円×50名×2回で3000円と記載されているが、記載間違いか。
- A はい。50円×30名×2回で3000円となる。
- Q 水辺を中心とした地域づくりとして素晴らしい試みだと思う。今回は堀下りが中心でイベントを2回行うとのことだが、この「堀下り」の他に併せて何か活動を行う予定はあるか。
- A 「堀下り」の前に必ず勉強会を開催する予定となっている。勉強会では堀の役割や危険性、また南染師町等の古くからある地名についてなどを学ぶ機会としたい。

- Q** 収支予算書に記載のある歴史講話謝礼と書いてあるのが、勉強会に該当するものか。
- A** はい。地元の歴史に詳しい講師を呼ぶ予定だ。
- Q** 今後はこの「堀下り」を中心として、どのように発展させ、活動を継続していくのか。
- A** 場所的にどこかシンボリックなところを作りたいと考えていて、七郷堀ではやはり南染師町だと思っている。地元ではお祭りもやっているなので、まずこの南染師町での活動をメジャーなものにして、それを他の地域でも波及させたい。候補としては、試験的に「堀下り」を行った3か所は、可能でないかと感じている。それぞれの地域で町内会や地域の方と話し合いをしながら開催し、そこに地域外の方も呼び込めるような仕組みにしていければと思う。特に南染師町は、地下鉄河原町駅にも近いので、地域外の方を呼び込みやすい地域でもあると考えている。
- Q** 天候が悪い時は、事業をどうするのか。
- A** 中止になる。安全性を考慮し、他のイベント以上に慎重に判断していく必要があると考えている。直前ではなく、前もって中止の判断をしていくことになると思う。堀の水量は当日の降雨量の影響よりも、むしろ前日に降雨量や山の方で何日も前に降雨量の影響を受けやすい。行政担当部署としっかり打ち合わせをしていきたい。
- Q** 堀清掃に子どもたちを巻き込んでやっていきたいとの説明であったが、時期を変えてそういうイベントを増やすという計画はあるか。
- A** 清掃活動は今までもしているが、もっとやりたいという気持ちがある。南染師町の堀の法面はきれいな石垣になっているので、その石垣が見られるようにしたい。また染落としや洗い物等に利用した堀へ降りていく階段もあるので、そこも見られるようにし、昔を懐かしめるようになれば良いと思う。
- Q** 舟に子どもは乗船できるか。
- A** ①のイベントは子ども対象となっている。実際には、子どもだけを対象とすると危険なので親子ペアでの参加とし、また幼児は無理なので、小学生以上を対象と考えている。②のイベントは、大人も参加可能になる。